

言葉を食べる

奨励	望月 修治【もちづき・しゅうじ】
奨励者紹介	日本キリスト教団同志社教会牧師

さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒野の中を、霊によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食べず、その期間が終わると空腹を覚えられた。そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。更に、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せた。そして悪魔は言った。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任ざられていて、これと思う人に与えることができるからだ。だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」イエスはお答えになった。

「『あなたの神である主を拝み、

ただ主に仕えよ』

と書いてある。」そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。というのは、こう書いてあるからだ。

『神はあなたのために天使たちに命じて、

あなたをしっかり守らせる。』

また、

『あなたの足が石に打ち当たることのないように、

天使たちは手であなたを支える。』

イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』と言われていた」とお答えになった。悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。

(ルカによる福音書 4章1—13節)

いのちの根っこ

皆さんが今、大切だと思っていることは何でしょうか。「何よりもまず大切にしたいこと」は何でしょうか。生きることにおいて「何を大切にするか」、それが皆さん一人ひとりの生き方、皆さんの家族の生き方、あるいは学校のあり方の方向を決めます。なぜかと言えばそれは「いのちの根っこ」をどう育てるかということだからです。皆さんが学んでおられる同志社大学を設立した新島襄は教育者である以前に、アメリカン・ボードという北米最初の超教派的な外国伝道団体の宣教師として日本に派遣され、聖書を根っことする教育を行うことを基本として同志社英学校を設立しました。同志社の根っこには聖書があります。でも聖書って難しいとお思いになりませんか。はじめて聖書を手にとって、開いて、読んでみたときに、「わー面白い」と思った人はまずおられないと思います。聖書は2000年、あるいはもっともっと前の、しかも日本ではなく、ユダヤという国で起こったことが書いてあるのですから、読んでよくわからないと思うのが当たり前のことです。でも、あるとき「へー聖書ってそんなことを言っているのか」と気になりだすことが起こり始めるのです。そのときに、面倒くさいなどどこかで思いながらも、しかし投げ出さないで、もう少し突っ込んでみようか、気にしてみようかと思ってくださったのが、今日ここに来られる皆さんです。

神の絵本

では、聖書にはどんなことが書いてあるのでしょうか。聖書にはたくさん「なるほど」が書かれています。いつも体験していること、見慣れていることが全く違った意味をもってあるのだということに気づかせてくれる、そういう意味での「なるほど」がたくさん書かれています。

そんな聖書がある人は「神の絵本だ」と言っています。神様の働きという見えないものを、文字という絵の具を使って描いている「神の絵本」だということです。だとすれば、聖書を読むときは、絵本を読むときの感性で読むのがポイントになります。例えば、イエスが湖の水面を歩いて舟にいる弟子たちに近づいてこられたという話が福音書に記されています。この記事を読んで、そんな自然法則に反するようなことが本当にあったのかと思ったことがおありかと思います。でも絵本を読むときに、そのような疑問のもち方を私たちはしません。プレーメンの音楽隊は歳をとってそれぞれお払い箱になったロバとイヌとネコとニワトリが森の中の小屋にいた泥棒たちを、力を合わせて追い出して皆で幸せに暮らしたという物語ですが、これを誰かが、「そんなことはあり得ない。動物が人間を追い出すなんてばかばかしい」と言ったとしたら、皆さんは、それは絵本の読み方、楽しみ方を知らないのだと言われるはず。聖書も同じです。こどもたちが絵本の世界に没頭する、あの感性が聖書を読むときに大事なのです。

作家の柳田邦男さんが、人は人生のなかで、三度違った形で絵本に出会うと言っておられます。一度目はこどものとき、すなわち絵本を読んでもらうときです。二度目はこどもを育てるとき、今度は絵本を読み聞かせる立場で絵本と出会うときです。そして三度目は人生の後半になってから、いろいろなことを体験して絵本の世界の奥深さへの気づきや発見が起こっていくときです。

絵本をもって来ました。『三びきのヤギのがらがらどん』です。詩人で歌人でもある俄万智さんは2歳から3歳のころ、『三びきのヤギのがらがらどん』という絵本を一日に幾度もお母さんに読んでもらっていました。幼児は好きな物語や絵本を繰り返し繰り返し親に読ませます。それは一カ月、半年と続くこともあります。俄さんはおそらく2歳ごろから1年以上にわたって、この絵本を読んでもらっていました。こどもが同じ物語を読んでせがむのは、読んでもらうたびに面白く、心が躍り、楽しいからです。その楽しさを幾度も確かめることができるほど、喜びに充ちた時はありません。こどもは喜びを感じるときこそ伸びやかに育ちます。決して教訓や知識や理屈で育つではありません。幼い俄さんもお母さんが読んでくれる絵本を通して、物語を通して、言葉を通して、言葉が楽しみと喜びを与えてくれるものであることを体験しました。言葉には見えないものを見るようにし、生き生きとした喜びをもたらしてくれる力があることを、本能的に感じ取りました。

俄さんは3歳の時、文字をまだ読めなかったのに『三びきのやぎのがらがらどん』の文章を一言一句違わずに話すことができました。それは「本を読んだつもりごっこ」だったのだそうです。一言一句違わないというのは、すごいと大人は思いますが、幼稚園のこどもたちがクリスマスのページェントなどで長い言葉や歌を間違わずに語ったり歌ったりする姿を見ていると、これは俄万智さんが特別な子だったのではなく、すべてのこどもの幼児期に備えられている不思議な力なのだと思います。

俄さんの体験的読書論を読んでいますと、こどもは言葉を食べるのではなく食べるのだという納得のさせられ方をしています。自分に喜びをもたらしてくれる「おいしい言葉」をこどもは食べるのです。おいしい言葉を心ゆくまでたっぷり食べ、心深く喜びを味わったこどもは、いつしかもおそらく無意識のうちに、その言葉を紡ぎだします。それはいつのことかは分かりませんが、あるとき不思議に紡ぎ出されるのです。おいしい言葉を日々の糧としてこどもにいわば口移して食べさせることが親や大人の務めなのだと思います。

神とのおつきあい

さて今日は、荒野においてイエスが40日間にわたって悪魔からさまざまな試みに遭ったという物語を読んでいます。これは三つの試みの物語です。第一は、空腹を癒すためにそこに転がっている石をパンに変えてみたらどうか、という試みです。第二に、あなたが地上の栄光を受けたいと思うのだったら私を拝んでみたらどうか、というものです。第三に、高い所から飛び降りてみたら神様があなたを守ってくれるだろうと言った、というものです。この三つの試みは、人間の欲望、つまり食べ物や自由を手に入れる力、この世界のなかで自由自在に行動できる超人的能力、そして何者にも勝る財力や権力についての試みとすることができます。イエスはこの三つの試みに対して、何れも聖書の言葉によって答えています。

「石にパンになるように命じたらどうか」という試みに対しては、

「人はパンだけで生きるものではない」（人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる 申命記8章3節より）という言葉。

「もしわたしを拝むなら、この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう」という試みに対しては、「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」（あなたの神、主を畏れ、主にのみ仕え、その御名によって誓いなさい。申命記6章13節）という言葉。

そして「神の子なら、神殿の屋根の上から飛び降りたらどうだ」という試みに対しては、「あなたの神である主を試してはならない」（あなたたちの神、主を試してはならない。申命記6章16節より）という言葉を用いて答えています。ここでイエスが引用した聖書の言葉は、いずれも比較的によく知られている言葉だと思うのですが、なかでも特に「人はパンだけで生きるものではない」という言葉は、その筆頭格に挙げるすることができます。

ただし、よく知られていることに比例するように誤解されがちな言葉でもあります。教会に集っている私たちはこの言葉をよく知っています。そして次のように思っています。「人はパンだけで生きるものではない」それは正しい。しかしやっぱりパンがなければ生きられない。どんな人であっても、パンがなくて飢えてしまえば死んでしまうしかない。人はパンがなければ生きられない。人はパンだけで生きるものではないということは、余裕のあるときのことであって、切羽詰まったときにとてもそんなことは言っていられない。やはりパンがなければ駄目だ。したがってこのイエスの言葉は割り引いて聞かなければならないと、どこかで考えてしまっています。

「人はパンだけで生きるものではない」という言葉は旧約聖書の申命記8章3節から4節に記されています。

主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。この四十年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった。

これは、次のような文脈のなかで語られています。遠い昔、エジプトで苦しめられていたイスラエルの人びとは、モーセに導かれてエジプトを脱出し、パレスチナの地に向かうのですが、到着するまでに40年間も荒野の旅を旅しなければならなかったのです。その40年の荒野の旅の間に、イスラエルの人びとは厳しい飢えを体験しました。そのときに、神は人びとが眠っている間にマナ（食べ物）を天から降らせて、人びとを飢えから救いました。その出来事との関連のなかで、「人はパンだけで生きるものではない」という言葉が語られて

いるのです。

ここで言われているのは、人はパンだけで生きるものではない、神の言葉によって生きるのだから、あなたがたはそのことをよく承知して飢えにも耐えなさいということではありません。人びとの飢えに対してまず行われているのは食べ物を備えることです。その上で、あなたがたはわたしの言葉によって生きるのだと語られているのです。神の言葉によって生きるということは、パンなど食べなくても聖書を読んでいるだけで、それでお腹がいっぱいになるということではありません。神の言葉を聞いて生きるということは、神とおつきあいをすることです。

ことばを食べる

神とつきあう生き方をすることを、預言者エレミヤはこう語りました。

あなたの御言葉が見いだされたとき／わたしはそれをむさぼり食べました。／あなたの御言葉は、わたしのものとなり／わたしの心は喜び躍りました（エレミヤ書 15章16節より）。

エレミヤは紀元前7世紀に生きた預言者です。当時のイスラエルはヨシヤ王による宗教改革が行われ、新たな安定が広がっていた時代でした。そのときにエレミヤは災いの到来を語り、イスラエルは滅びると預言し、神の厳しい裁きを繰り返し告げたのです。当然のことながら激しい反発を受けます。エレミヤは人びとの迫害にあい、嘲笑にも耐えねばなりません。裁きを語ることが神から託されたことであったがゆえに、エレミヤはその務めを担うのですが、それは恥とそしりを一身に受けることになりました。それなのにエレミヤは神の裁きを告げることを自らの役目とし続けました。それは「神の言葉をむさぼり食べ」たからだとしてエレミヤは告白しています。神の言葉を読んだからではない。またただ聞いたからでもない。あるいはそうしなければという義務感からでもない。「あなたの御言葉をむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり、わたしの心は喜び躍ったからだ」とエレミヤは語っています。

神の御言葉をむさぼり食べると心が躍ったというのは、どういうことでしょうか。御言葉を食べる、つまり聖書に向き合い、それを受けとめて生きて行くとき、何が私たちに起きるのかと言いますと、視点が変わるのです。

視点を転換する

もう一冊絵本を持ってきました。『ありがとうもだち』という絵本です。本当は、はじめから読んだらよいのですが、時間がありませんのであらすじを申しあげます。きつねとオオカミが登場します。二人は友達です。ある日オオカミの家にきつねが遊びにきました。きつねはまだ海をみたことがないということから、オオカミはだんだんと調子に乗って、きつねに釣り自慢をはじめ、本当は釣ったことなどないのに、カジキマグロを海釣りで釣ったと言ってしまい、翌日海に行き、もう一度釣ってみせるといことになりました。翌朝二人は自転車に乗って海に出かけ釣りを始めます。はじめて海に来たきつねなのに、どんどん魚が釣れます。オオカミは全く釣れません。夕方になってもオオカミはカジキマグロどころか、小魚さえも釣れません。オオカミはバケツを蹴飛ばして八つ当たりをし、もう一つのバケツも蹴飛ばそうとして、うつむいて小さな声で「ごめんな、カジキが釣れなくて」ときつねに言います。ところがきつねは思いがけないことをオオカミに言いました。「何いってるのオオカミさん。もっとでっかいものを釣ってくれたじゃない」。オオカミは何のことやらわからずにポカーンとして顔をあげました。きつねは言います。「海だよ、オオカミさん。ぼくたち、海釣りに来たんでしょ。それで、海が釣れたじゃない。まるごとの海だよ」。

これは見事な視点の転換です。一日中釣りをしても何も釣れなかった。カジキマグロを釣ると自慢したオオカミのプライドは、ずたずたです。その状況は変わりようがないのですが、「海が釣れたじゃない」というきつねの言葉で、その状況を受けとめる視点が全く変わります。そしてこの日の海釣りは、全く違った意味をオオカミにもたらすのです。

御言葉を食べるとエレミヤが語っている体験がもたらすのは、このような視点の転換が起こることです。違った受けとめ方ができて、別の生き方があると気づくことができる。「救い」とはそのような視点の転換が与えられることです。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る言葉によって生きる」とは、このような意味での救いを味わうことです。

先年亡くなられた旧約学者の左近（さこん）淑（きよし）さんの言葉です。「聖書に生きた人はみな聖書を読み捨てたのではなく、食べかみ砕いて生きた。聖書は読むものではない。食べるものである」。

2011年7月13日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録